研究報告

中国における主介護者のエンパワメント尺度の 内容妥当性と翻訳妥当性に関する研究 —要介護高齢者の日常生活動作の維持向上に焦点を当てて

Content Validity and Translation Validity for Measurement of Main Care-givers' Empowerment in China

—Focusing on the Maintenance and Improvement of Daily Life Activities of Elder Care-receivers

呉 小玉

Xiaoyu Wu

キーワード：主介護者エンパワメント尺度，内容妥当性，翻訳妥当性

Key words : Main Care-givers' Empowerment (MCE) measurement, content validity, translation validity

Abstract

This article is part of my Ph D dissertation work dealing with measuring the practicality of Main Care-givers' Empowerment (MCE). The questionnaire used in this study was derived from a Japanese version containing 93 sets of questions.

The measurement conducted in China includes three steps. In the first step simplification was made to reduce the number of questions from 93 to 64 by three senior experts ; In the second step, analyses of the coherency and index correlation between the theoretical components and the remaining 64 questions were carried out by 4 experts. In the analyses the average coherency rate was found to be 72.4 % and the average correlation index was 85.8 %. The analytical result indicated that 22 of the questions need to be further amended. In the last step, the Japanese questionnaire version was first translated into Chinese and then translated back into Japanese by two bilingual Chinese students in Japan. In this way the reliability of the translation was testified. Finally, the quantitative data, collected from the survey on 10 polled between 10 days interval, using both Chinese version and Japanese version, were tested. The correlation coefficient of the Paired Samples Test r reached 0.92, showing high levels of translation validity.

Results from the tests indicates that the Chinese version of MCE is practical and reliable.

要 旨

本研究の目的は、博士研究で開発した日本版「中国における主介護者のエンパワメント」93項目尺度案を中国でプレテストや本調査を行うために、3段階で内容妥当性と翻訳妥当性を検証することであった。検討した結果は、第1段階では、専門家3人により93項目から64項目に精錬された。第2段階では、エキスパート4人により64項目と概念要素を合致率とIndex関連指数で検討した。結果は、合

受付日：2005年5月13日 受理日：2007年2月16日

園田学園女子大学(中国杭州師範学院護理学院) Sonoda Women's University(College of Nursing of Hangzhou Normal University)

致率が平均 74.2 % であり、関連指数が平均 85.8 % と高かった。その後 22 項目を修正して、64 項目日本版となった。そして第 3 段階は、64 項目を中国語に翻訳し、在日中国人 2 名により反訳し、翻訳の再現性が検証された。さらに 10 人より日本版と中国版を 1 週間あけてそれぞれ答えてもらったデータを量的な手法で検証した。結果は、Paired Samples Test で日本版対中国版の間有意差が見られず、相関係数が 0.92 と高かったため、翻訳の妥当性が検証された。

したがって、「主介護者エンパワーメント尺度」中国版は内容妥当性と翻訳妥当性が支持されたといえる。

I. 研究の背景

中国では、2004 年末に人口は 12 億 9,988 万人に達し、2005 年 1 月 6 日に 13 億人目が出生した(朱ら, 2005)。人口の増加につれて高齢化社会の問題もますます深刻になってきた。

中国の高齢化社会の特徴は、経済的な発展が不十分な状況で、高齢化を迎えたため、社会的に介護者支援システムが未形成であることである。そのため、要介護高齢者の日常生活動作の維持向上は、身近な家族に頼らざるをえない状況にある(呉, 2001)。今後長期間にわたり、家族による介護が基本となることが予測され、特に高齢者の日常生活動作の向上には家族介護者の役割が重要であると考えられる。しかしながら、中国も日本と同様に高齢化、核家族化などの変化に伴って家族の機能も変わってきている。家族だけによる高齢者の介護は、将来的に実行困難な状態になることが予測される。このため、高齢者および家族が地域でどのくらい自立した生活をおくっているのかということ把握し、行政的・地域的な支援システムをつくり、高齢者個々の文化を尊重したうえで、家族介護を支え、質の高い介護の実現に向けて、中国独自の介護者援助システムをつくることが求められている。

II. 先行研究の概要

本研究者はこれまでに、中国における高齢者への退院指導の実施現状や課題を明らかにした。すなわち、高齢者の日常生活動作における質の向上のためには、身近な援助者としての家族のケア力に注目し、家族介護者が力を発揮し、家族への適切な援助方法を提供することが看護者の課題となっていることを明らかにした(呉, 2003; 呉ら, 2004)。介護者はサービスの受け手としてだけの存在ではなく、発信していく力をもつ存在でもあると言われている(井伊, 1996)。対象者のエンパワーメントを引き出すことができるかどうか

かは、ケア提供者がどのようにエンパワーしているかに関係することも指摘されている。このことから、介護者の個人的潜在的な力は、要介護者の日常生活行動能力の向上に繋がっていると考えられる。したがって、介護に当たる家族介護者がどのような個人的潜在的な力をエンパワーメントとして有しているかを測定する必要がある。しかし、文献検討からは、介護者エンパワーメントの測定尺度が見当たらず、中国の文化に合った家族介護者のエンパワーメント測定尺度の開発が必要である。このため、エンパワーメントとその相当する「自力更生」との関係に焦点を当てて、以下のように文献検討を行った。

エンパワーメントという言葉は、欧米諸国から発達してきた用語であり、広辞苑には説明がなかった。森田(1998)は、エンパワーメントとは、「私たち一人一人が誰でも潜在的に持っているパワーや個性をふたたび生き生きと息吹かせることである。すべての人々が持つそれぞれの内的な資源にアクセスすることである」と述べている。精神保健の領域では、エンパワーメントについて、「人が彼らの環境を支配し、自己決定を達成することを可能にするプロセス」(Simmons et al., 1983)とされている。WHO のオタワ憲章(WHO, 1986)では、エンパワーメントを健康の側面で捉え直して、「人々が統制感(sense of control)を増大し、健康を改善する過程である」と定義している。また、Wallerstein(1992)は、「個人やコミュニティの統制の増加や社会的効力、コミュニティの生活の質の向上と社会正義を目標とした人々や組織、コミュニティの参加を促進する social-action の過程」とエンパワーメントを定義している。

地域保健学・地域看護学領域では、エンパワーメントは疾病のリスクファクターとされるパワーlessnessへの注目に伴って提唱されるようになった。「エンパワーメント教育」の中で用いられたのがその起源である(下山田ら, 2002)。地域保健活動の方向転換とともに、専門家には意識変革とヘルスプロフェッショナル

の力量形成が求められており、そのキー概念の1つがエンパワーメントであるといわれている(麻原, 2000)。看護界では「個人が自己の生活をコントロール・決定する能力を開発していくプロセス」を意味するものとして使用されている(野嶋, 1996)。日本では、「主体形成」や「力量形成」といったようなエンパワーメントに相当する概念を用い、地域看護領域において、実践活動を展開してきた。

一方、能力障害に直面する場合(パワーlessness)のエンパワーメントの有効性に関する研究が中国の文献検討の中にほとんどなかった。しかし、従来の中国文化には、「自力更生」というエンパワーメントと同様の意味をもつ熟語が存在している。簡明漢英辞典(北京語言学院, 2000)では、「自力更生」を Self-dependence や Self-reliance Regeneration by one's own efforts と翻訳し、「自分の力量に頼って、建設に従事する、或いは問題を解決する」と説明している。日本の国語辞典(小学館国語辞典編集部, 1974)では「よい状態に戻る」、「生き返る意」、「墮落したり自活能力を失っていたりしていた人がまともな社会生活が送れるようになること」、「役に立たなくなったものに手を入れて、もう一度使えるようにすること」と説明している。Man(1998)は、中国文化に合った脳損傷患者の家族エンパワーメント尺度を開発する際、中国の「自力更生」という概念をエンパワーメントと類似した概念とした。金(1998)は、セルフ・エンパワーメントを自強(自分を強くする)の意味として理解し、「弱者は慈善的な援助に頼らず、自らの力に頼って自尊心を保った生活をするということである」と説明し、セルフ・エンパワーメントを「自力更生」として理解してもよいと主張した。また、「男と女」という本の著者(施達, 2003)は、婦女解放について、「どのように女性を抑圧から開放させるかということを考えるとき、エンパワーメントということはその答えである」と指摘し、「エンパワーメントとは、女性に対して潜在能力を発展し、自力更生をする過程」のことでありと述べた。彼女は、エンパワーメントと自力更生との関係は、「自力更生」がエンパワーメントの過程であると述べた。

エンパワーメントと「自力更生」とはどの程度共通であるかを分析した。研究方法として、①CINAHLとPsycINFOの検索を通して、1972～2004年において登録されているエンパワーメントに関する文献をレビューして分析した。②エンパワーメント概念に相当する中国における「自力更生」の概念を分析した。③2つ

の概念を統合して中国におけるエンパワーメントの概念を構成する、という手順に従った。

文献検索や概念分析をした結果(呉, 2005 b)から、自力更生とエンパワーメントとの関係を明らかにした。自力更生とエンパワーメントは、パワーの欠如に注目する2つの概念の発展の着目点が一致しており、「個人的リソース」・「主体性」・「知識と技術」・「役割認識」・「結果期待」・「信念」というような類似の構成要素も多く、人間行動に肯定的な側面を共通にもっている。また、すべての人間は、自分の生活を変えることのできる潜在能力をもっているという、人間の潜在的な力を重視する考えが共通し、自身の生活をコントロールし、決定する能力を開発していくパワーを獲得する過程も類似している。しかし、この2つの概念には異なる点もある。1つは、パワー欠如に関する発端や背景として、エンパワーメントは権力と人格の不平等によるものであったのに対して、自力更生は、経済的なパワー欠如を解決することから始まった。また、自力更生という概念は自らの力あるいは資源だけに依存する意味が強い。それに対して、エンパワーメントは、自分の力だけに依存するという意味はない(ヒマラヤ技術協力会, 1978; Klakovich, 1995; Man, 1998, 2002; 金佩璋, 1998; 金葉, 2000; Mok et al., 2002)

研究者は、中国における介護者へ介入する看護の視点から、この2つの概念の共通点と相違点を統合することができれば、高齢者や介護者への支援のあり方も明確になりやすいと考えた。すなわち、経済的に家族介護者の力に依存しなければならない中国の国情では、地域看護者からの高齢者や介護者への支援によって、個人のもつ内在する力にアクセスすることができるようになることは重要である。したがって、本研究では、上記の2つの概念を統合して、中国におけるエンパワーメントを「自己潜在能力活性化過程」として提唱する。しかし、それは日本語にもなく、中国固有の概念でもないため、日本語版においては、「中国におけるエンパワーメント」をキーワードとして用い、中国語に翻訳する際は「自己潜在能力活性化過程」をキーワードとして用いる(呉, 2005 b)。

さらに、中国の介護文化の視点から文献検討をした。「好人自有天助」(善を行う人間は神様に恵まれる)・「善有善報」(自ら善行を行うと、必然的な結果として善い報いが得られる)という因果関係は、中国介護文化にも浸透している。中国の家族介護において、

老化は人間なら誰にでも起こる身体的な変化であり、その意味で、介護は誰にでも起こりうることを考える介護者が多く存在している。要介護高齢者は人間の弱者であり、要介護高齢者を大事にすることは善行として捉えられている。しかし、善行という捉え方は、「血濃与水(水より血が濃い)」という人間関係の複雑な絆や、儒教文化の介護行動への気兼ねによる影響を受け、過剰なケアを提供したり、要介護者の日常生活の自立度に影響を与えたりする。これらの点を考慮して、中国の介護文化にエンパワメントを加味して「中国における主介護者エンパワメント尺度」の枠組を構成した。文献検索から明らかにした「主介護者のエンパワメント」には、「個人的なりソース」、「介護に関する主体性」、「介護の信念」、「介護に関する知識と技術」、「周囲への気兼ね」、「要介護者との絆」、「介護の役割認識」、「介護という善行」、「介護の結果期待」という9つの要素が含まれていた。筆者は、これらの構成要素に沿って中国の文化に合った介護者のエンパワメント測定尺度案を開発した(呉, 2005 a)。

Ⅲ. 研究目的

研究全体として、下記のような手順に従った。

1. 主介護者のエンパワメントの測定尺度案を作成する(呉, 2005 a)。
2. 主介護者のエンパワメント尺度の内容妥当性と翻訳妥当性を検証する。
3. 主介護者のエンパワメント尺度のバイアスを検証する。
4. 主介護者のエンパワメント尺度の内的整合性と一貫性を検証する。
5. 主介護者のエンパワメント尺度の安定性を検証する。
6. 主介護者のエンパワメント尺度の構成概念妥当性を検証する。
7. 主介護者のエンパワメント尺度の基準関連妥当性を検証する。

本研究の目的は、上記2を中心に開発した尺度の内容妥当性と翻訳妥当性を検証することである。

Ⅳ. 操作的用語の解説

1. 主介護者のエンパワメントの定義

エンパワメントは個人の内在する資源を活性化す

るプロセスであるが、本研究は、そのプロセスのある時点での状態をアセスメントするものである。したがって、次のように定義した。主介護者のエンパワメントとは、「主介護者は要介護者の日常生活動作の維持向上という目的を達成するために、要介護者との共同作用により、自分の内在する資源を介護の役割遂行のために引き出す状態」である。その状態の中には、「個人的なりソース」、「介護に関する主体性」、「介護の信念」、「介護に関する知識と技術」、「周囲への気兼ね」、「要介護者との絆」、「介護の役割認識」、「介護という善行」、「介護の結果期待」という9要素が含まれていると設定した。

2. 9要素の操作的定義

1) 「個人的なりソース」

主介護者の「個人的なりソース」とは、要介護者の日常生活動作の維持向上に役立ったり、期待できる主介護者の身体的・精神的・心理的な状態および主介護者が個人的にもっている社会的な資源のことである。

2) 「介護に関する主体性」

「介護に関する主体性」とは、主介護者は、要介護者の介護に対して、他者に依頼されて介護の役割を担うのではなく、自分自身が主体となって介護に関連する行動をしようとする態度のことである。

3) 「介護の信念」

ここでいう「介護の信念」は、主介護者が要介護者に介護を提供することへの心理的動機づけを指す。

4) 「介護に関する知識と技術」

「介護に関する技術と知識」とは、主介護者が介護生活に役立つ技と知識を有していることであり、主介護者は新しい介護知識への積極的な取り込みと自分が本来もっている介護知識を柔軟に統合して介護を提供することでもある。

5) 「周囲への気兼ね」

「周囲への気兼ね」とは、主介護者が介護行動を行うときに、「周囲からの心理的な影響」および「周囲の肯定」を求める心理的な状態を指している。

6) 「要介護者との絆」

「要介護者との絆」とは、主介護者の「要介護者との

図1 質問紙枠組
(括弧内の数字は質問項目の番号)

人間関係」と「要介護者に対する愛情の表出」および「要介護者との一体感」というような内在的な要素である。

7) 「介護の役割認識」

「介護の役割認識」とは、主介護者は、要介護者の日常生活動作を維持向上するために、単にケアを提供するだけではなく、要介護者自身でできることは要介護者自身が主体的に問題解決できるように支援するということの意識である。

8) 「介護という善行」

「介護という善行」とは、主介護者が善意と思った介護の行為をいう。

9) 「介護の結果期待」

「介護の結果期待」とは、介護者が要介護者に対してもつ、介護による結果の予測のことである。

V. 質問紙草案の枠組構成

上記の操作的定義に基づき、質問紙草案の枠組を構成した(呉ら, 2006)。それにそって 93 項目質問用紙を作成した(括弧内の数字は質問項目の番号)(図1)。

エンパワメント質問紙は、図1のような概念構造をもとに質問項目を作成するが、内容妥当性の検定で質問項目数が減少することが予測される。このため、できるだけ多くの質問項目をつくる必要があると考え、各要素に 10 個の質問項目を設定した。したがって、最初は「個人的なリソース」、「介護に関する主体性」、「介護の信念」、「周囲への気兼ね」、「介護の役割認識」、「要介護者との絆」、「介護という善行」、「介護の結果期待」の 8 要素に関して各 10 項目、および「介護に関する技術と知識」に関して 13 項目、総計で 93 項目という多くの質問項目を作成した。

回答は肯定的な質問項目に対して、「まったくそうではない」を 1 点、「あまりそうではない」を 2 点、「や

やそうである」を3点,「非常にそうである」を4点とした。逆に否定的な質問項目に対して,各回答肢に逆順に4,3,2,1の得点を与えた。したがって,尺度の総得点数が高いほど,主介護者のエンパワーメントが強いことを示す尺度となるように設定した。

Ⅶ. 内容妥当性および翻訳妥当性の検討方法

内容妥当性の検討について,石井らは「それぞれの質問の内容が正しく適切に測定されているかを理論的に評価する概念である。検討には統計手法は用いない」といっている(石井ら,1999)。しかし,野澤は,Waltz & Bausellによって開発された内容妥当性指標を改善した方法(Lynn,1986)で,量的統計手法を用いて内容妥当性を検討した(野澤,2003)。本研究は以下の方法を用いて筆者が開発した尺度の内容妥当性及び翻訳妥当性を検討した。

1. まず,作成した質問項目は構成概念と合致しているかどうかを検討し,本研究の指導教授および介護やエンパワーメントに関して研究している専門家等3名とともに質問項目を1つずつ検証,精練した。専門家は,看護大学地域看護学と老人看護学領域の教員3名であり,博士の学位をもっている。

2. 次に精練された質問項目の構成要素ごとに表にし,構成要素を代表しているか代表していないかを,エキスパート4名に判断してもらった。4名とも修士以上の学位をもっており,介護者に関わり,介護に関する研究をしている(3名),老人看護を研究し,介護者との関わりが多い(1名)。

3. Lynn(1986)によって開発された4段階評点尺度を用いて,エキスパート4名のデータについて,内容妥当性を数量的に検討した。

4. 以上の質問用紙を日本語で作成し,中国語に翻訳した。

本研究論文に示したバージョンは日本語版である。しかし,調査対象者は中国の地域住民であり,さらに今後日本と中国を文化的に比較研究できるように,中国語と日本語の質問紙の一致性を保つ必要がある。このため,翻訳した中国語の質問文を中国語と日本語とも堪能な在日留学生2名(看護管理専門の修士2回生と地域看護専門の博士1回生)に,再度日本語への反訳を依頼し,全部一致するまで,繰り返す作業を行った。

5. 日本語版と中国語版が一致しているかどうかを

検証するために,中国語と日本語ともに堪能な留学生10名に依頼し,日本語版と中国語版について1週間の間隔をあけて調査を行い,データを収集し量的に分析した。留学生10名は,医学博士6名,看護管理修士2名,小児専門の博士2名であった。

Ⅶ. 倫理的配慮

倫理的配慮に関しては,まず著者の所属大学の研究倫理委員会から承認を受けた。次に研究者自身が対象者に書面を手渡し,研究の意義・目的・方法,データの守秘,強制でないことなどを十分に説明し,文書により同意を得た。

Ⅷ. 結 果

1. 尺度の日本版内容妥当性に関する検討

1) 専門家による質問項目の精練

作成した質問項目が構成要素と合致しているかどうかを検討するために,本研究の指導教授および介護やエンパワーメントおよび介護者に関して研究している専門家3名によって,各項目に対して内容妥当性を討議し,質問項目の意味が構成要素と合致するかどうか,多数の質問項目の意味が重複しているかどうか,言葉づかいが妥当であるかどうか,および構成要素ごとの項目数にバランスが適切かなどを中心に検討した。

「個人的リソース」の構成要素に関しては,“私は彼(彼女)の介護に対する気持ちを打ち明けている”のような質問では,“気持ちを打ち明けている”ということは意味が不明瞭と判断され,“要介護者の日常生活動作の維持向上に対して意欲がある”に変更した。また,“私は彼(彼女)が自力でベッドから起きられるように手の届く場所に紐などを付ける”,“私は彼(彼女)が自力でトイレ動作ができるようにトイレトペーパーなど必要品を手の届く場所に置く”,“室内の硬いものに柔らかく厚みのあるものでカバーをかける”といった具体的な質問項目は,個人的に本来もっている知恵や資源のことを表しており,もし対象者がそれらの行動を行っていなかったら答えにくいだろうと判断され,削除した。

また,「個人的リソース」の“私は彼(彼女)の介護に関する社交活動を広くしている”という項目は,「個人のリソース」の要素を代表できないと判断され,削除

した。“私は友達や親戚の知恵や力を大事にしている”という項目に対しては、友達と親戚両方が入り、答えにくいと判断されたので、それを“介護の支援をしてもらう親戚がいる”、“介護の支援をしてもらう友達がいる”という2つの質問項目に変更した。

「介護に関する主体性」に関して、“私は自分のことは自分で決める”と“私は彼(彼女)が自立できるように必要な人間だと思う”という質問項目は、“自分のこと”という言葉が“介護”と繋がりにくいことと、“必要な人間”という言葉が必ずしも主体性をもっているとはいえないことから、“人からいわれて要介護者を介護することではなく、自分が決める”と1つの項目にした。

以上のように各項目ごとに検討し、最初の93項目から64項目へと精錬した。次に、精錬した64項目についてエキスパートに検討を依頼した。

2) エキスパートによる質問項目の修正

この段階は、質問項目を削除する目的ではなく、項目を構成要素と合致できるように修正していくことを目的とした。したがって、質問項目が構成要素と合致しているか、および構成要素と質問項目がどの程度関連しているかの判断を求めた。エキスパートは、介護者に関わり、介護に関して研究をしたことがある大学の教員2名、および老人看護を研究し、介護者との関わりが多く、病院で看護教育を担当している2名の総計4名であった。

(1) 質問項目と構成要素との合致率(表1)

64項目について、4名のエキスパート間の合致率を表1に示した。合致率は、“いつも要介護者の日常生活動作の維持向上を考えながら介護している”という項目では、4名がまったく一致しなかった0から、4名すべてが一致した100%までの幅があり、合致率の平均は74.2%であった。9構成要素ごとに合致率を比較して、表1に示した。合致率が最も高かったのは「介護の結果期待」要素であり、8項目の平均合致率は90.6%であった。最も低かったのは、「介護に関する主体性」要素であり、7項目の平均合致率は57.1%であった。

(2) 構成要素と質問項目との関連性(表1)

Lynn(1986)によって開発された4段階評点尺度を用いた。各項目ごとに、構成要素と項目間は、「大変関連があり、的を得ている」を3点、「関連があるが、少しの修正が必要」を2点、「関連をさせるために修正

が必要」を1点、「関連がない」を0点という4段階で Index 関連指数(関連指数=

$$\frac{\sum(\text{各段階の回答人数} \times \text{各段階の評点の値})}{\text{回答者の総人数} \times \text{最高の値}} \times 100$$

すなわち、 $(3 \times \text{人数} + 2 \times \text{人数} + 1 \times \text{人数} + 0 \times \text{人数}) / ((\text{総人数}) \times 3) \times 100$ を求めた。関連指数が最も高かったのは100.0%、最も低かったのは66.7%、平均85.8%と合致率より高かった。

(3) 内容妥当性検討結果に基づく質問項目の再修正

合致率と Index 関連指数を統合した。合致率は平均75%以上(協力者の4人のうち3人以上)を基準とした。75%に達していない22項目に関して、修正する必要があると判断した。

修正が必要な項目に関して、エキスパートそれぞれのアドバイスを統合した。そして、質問項目を操作的定義した内容で吟味しながら、表2のように再修正した。例えば、関連性が最も低い「個人的リソース」要素に“要介護者の日常生活動作の維持向上に関心をもっている”、“要介護者の日常生活動作の維持向上に対して意欲がある”の2項目は、“要介護者の介護に対して、心理的な負担だと思わない”、“介護に対して私自身への支援が必要だと思っている”と内容を変更した。また、対象者が間違えて認識することを防ぐために、“在宅で介護をしていたとき身体的疲労を感じるものがあつた”といったような逆転の項目を“在宅で介護をしていたとき身体的疲労を感じるものがなかった”と変更した。「介護という善行」の要素に、“彼(彼女)自分がすると危ないから、代わりに私がしてあげる”という項目は、危ないという言葉を使うと、危ないと感じない対象者にとって答えにくくなるので、“要介護者自身が何もしなくても済むように、代りに私がしてあげている”という表現に再修正した。また、“常に自分のやり方に無理があるかどうかを見直す”の項目内の“無理がある”という意味が介護者に対する意味か、要介護者に対する意味か不明瞭であるので、“常に自分のやり方について自己評価をしている”と変更した。特に“いつも要介護者の日常生活動作の維持向上を考えながら介護している”という項目は、4名のエキスパートとも一致していなかったため、4名のエキスパートから助言を受け、それらの意見を統合し、“目標をもって要介護者の日常生活動作の維持向上を念頭におきながら介護している”と修正した。以上のような検討を通して、最終の日本版は64質問項目となった。

表1 エキスパートによる内容妥当性の検討結果

質問項目(*は逆転項目)		一致率(%)		修正項目
		合致率	関連指数	
リソース	1. 要介護者の日常生活の維持向上に関心をもっている	25	66.7	修正
	2. 要介護者の日常生活の維持向上に対して意欲がある	75	75	修正
	3. 在宅で介護をしていたとき身体的疲労を感じるがあった*	50	66.7	修正
	4. 在宅で介護をしていたとき精神的疲労を感じるがあった*	50	83.3	修正
	5. 介護疲れを解消するために気分転換をしている	75	91.7	
	6. 介護の支援をしてもらう家族がいる	75	91.7	
	7. 介護の支援をしてもらう親戚がいる	75	91.7	
	8. 介護の支援をってもらう友達がいる	75	91.7	
主体性	9. 人からいわれて要介護者を介護することではなく、自分が決める	50	83.3	修正
	10. いつも要介護者の日常生活動作の維持向上を考えながら介護している	0	75	修正
	11. いつも自分で介護上の生じる問題をコントロールしている	100	100	
	12. 自分の力を生かして介護の問題に取り込む	75	91.7	
	13. 自分の力を生かして要介護者の日常生活動作上の問題を解決する	50	83.3	修正
	14. 常に自分の介護の効果を考える	50	75	修正
信念	15. 常に自分のやり方に無理があるかどうかを見直す	75	83.3	
	16. 私が要介護者の介護をするのに最も適している	75	91.7	
	17. 要介護者への介護を継続していけると思う	75	83.3	
	18. 自分も介護される立場になるかもしれないので、いい介護をしておきたい	50	83.3	修正
	19. 要介護者によくしていることはいつか報われると考える	50	75	修正
	20. 要介護者の日常生活が維持向上することを信じている	100	83.3	
知識と技術	21. 介護していることは要介護者の日常生活動作の向上を図るために意義がある	50	83.3	修正
	22. 要介護者の日常生活動作を向上していることにやりがいを感じる	75	91.7	
	23. 要介護者の日常生活動作を維持向上するために必要な知識をもっている	100	100	
	24. 要介護者の日常生活動作を維持向上するために必要な技術をもっている	75	91.7	
	25. 要介護者への介護に対して、自分の知識や技術では足りないと感じている	100	100	
	26. 要介護者への介護に対する知識や技術を学びたい	100	100	
気兼ね	27. 要介護者への介護に関する情報を集める	50	83.3	修正
	28. 要介護者への介護に関する知識を他人から学ぶ(専門家など)	75	83.3	
	29. 要介護者のためだから、介護のやり方について家族の人に非難されても気にしない	75	75	修正
	30. 要介護者のためだから、介護のやり方について親戚の人に非難されても気にしない	75	83.3	
	31. 要介護者のためだから、介護のやり方について近隣の人に非難されても気にしない	75	83.3	
	32. 家族の人に認めてもらいたいので、要介護者のできることも介助をしてしまう*	100	91.7	
絆	33. 親戚の人に認めてもらいたいので、要介護者のできることも介助をしてしまう*	100	91.7	
	34. 近隣の人に認めてもらいたいので、要介護者のできることも介助をしてしまう*	100	83.3	
	35. 病前の要介護者との人間関係がよかった	75	83.3	
	36. 私は現在の要介護者との人間関係がよい	75	83.3	
	37. 私は要介護者の感情を受けとめる	75	75	修正
	38. 私は要介護者のためのことを要介護者に話す	75	75	修正
役割認識	39. 要介護者の喜びは私にとっても喜びになる	100	100	
	40. 要介護者の苦痛は私にとっても苦痛になる	100	83.3	
	41. 要介護者への介護をすることは当然のことだと思う	75	83.3	
	42. 要介護者自身の力で日常生活動作ができることが大事だと思う	75	91.7	
	43. 自分でできることは自分でしてもらうようにすることが大事だと思う	75	91.7	
	44. 自力で問題解決できたと感じられるように援助することが大事だと思う	100	91.7	
善行	45. 要介護者が新たな役割を見出すように働きかけることが重要だと思う	100	91.7	
	46. 日常生活動作を維持向上するために必要な住環境を改善すると考える	50	66.7	修正
	47. 家族全員と同じ目標を持つようにすることが重要だと思う	75	83.3	
	48. 要介護者が他人と交流の機会を持てるようにすることが大事だと思う	100	100	
	49. 要介護者が外出をできるように働きかけることが大事だと思う	75	100	
	50. 要介護者の日常動作が自立できるように最善の世話をしている	50	75	修正
結果期待	51. 要介護者自身がすると危ないから、代わりに私がしてあげる*	75	91.7	
	52. 要介護者自身がすると遅いから、代わりに私がしてあげる*	75	83.3	
	53. 要介護者自身がするとかわいそうだから、代わりに私がしてあげる*	75	91.7	
	54. 要介護者自身がすると危ないが、目を離さないでいてあげる	50	75	修正
	55. 要介護者自身がすると遅いが、できるまでに待つてあげる	50	75	修正
	56. 要介護者自身がするとかわいそうだけど、自立できるように励ましてあげる	50	75	修正
結果期待	57. 要介護者が規則的な日常生活を過ごせるように自己管理してほしい	75	83.3	修正
	58. 要介護者が日常生活の中で自分のできることを自分でしてほしい	100	91.7	
	59. 要介護者が日常生活の中で自分なりに目標をもってほしい	100	91.7	
	60. 要介護者が私を介護者として信頼してほしい	100	91.7	
	61. 要介護者が私に迷惑をかけたくない気持ちをなくしてほしい	50	83.3	修正
	62. 要介護者が日常生活行動上の問題を私と共有してほしい	100	91.7	
	63. 要介護者が日常生活行動の回復という目標を私と共有してほしい	100	91.7	
	64. 要介護者が私と一緒に日常生活の問題を解決するようにしてほしい	100	91.7	

表2 64項目の翻訳妥当性検定

Paired Samples Test													
Pair 1		Statistics				Paired Differences				t	df	Sig	
		Mean	N	Std.	Correlations	Mean	Std	Std. Error Mean	95 % Confidence				
									Lower				Upper
		日本語版	31.58	64	5.73	0.92	−0.27	2.31	0.29	−0.84	0.31	−0.92	63
中国語版	31.84	64	5.59										

2. 翻訳の妥当性に関する検討

最終の64質問項目の日本語版を作成した時点で、質問項目を中国語に翻訳し、その翻訳の妥当性の検討を2段階で行った。

1) 反訳の結果

1回目の反訳は、協力者に日本語の原版を見せず、説明も何もせずに依頼した。協力者2名から反訳した1回目の結果では、質問文の内容はほぼ一致していたが、動詞の漢字が異なった質問項目があった。たとえば、“要介護者自身が何もしなくても済むように、代わりに私がしてあげている”という項目では、「済む」を「すむ」と「澄む」、「代わりに」を「替りに」、「あげている」を「上げている」というような結果が出た。また、動詞の語尾も一致していなかった。例えば、1人の協力者は、「している」を「しています」、「なかった」を「なかったです」といったような敬語で反訳していた。

それに対して、動詞の漢字が違うことについて、違っていた項目の内容を日本語や中国語で口頭確認および反訳した日本語を中国語に再度反訳の形で1つずつ確認したところ、日本語の漢字の使い方は異なったが、言葉の意味は同様に認識していると確認できた。また、丁寧語を使っていた協力者に確認した結果では、中国語では、話す言葉において丁寧語などを判別しやすいが、協力者自身の研究調査の質問文をすべて丁寧語で作成しているため、今回の反訳も丁寧語で反訳した、という個人的な考え方によるものであった。2回目の反訳は、研究者が協力者と質問項目を口頭で意味を確認したうえで、協力者に前回の反訳したものや原版の日本語を見ないように再度反訳を依頼した。2回目の結果では、動詞の語尾は一致していたが、動詞の漢字は相変わらずそれぞれ5項目と2項目で異なっていた。例えば、「受けとめる」を「受け止める」、「目を離さない」を「目を放さない」と訳していた。それを前回と同じような手続きで確認して、再度反訳を依頼した。日本語版と中国語版がすべて一致するまで1名は

4回、もう1名は3回繰り返す操作をした。最後には、協力者2名の結果は、反訳した日本語を中国語に反訳しても、中国語を日本語に反訳してもすべてが一致した。

2) Paired Samples Test(対応のある場合の母平均値の差の検定)で検討した結果

協力者は、中国語と日本語とも堪能な中国人留学生10名であった。10名の協力者の親はすべて高齢者であり、親に対して介護をしたことがあった。協力者の年齢は30～40歳台であり、全員が看護学や医学の研究者であった。

日本語版と中国語版を1週間の間隔をおいて、それぞれに回答をしてもらった結果は表2に示した。各項目の回答平均点は、日本語版31.6、標準偏差5.73であり、中国語版31.8、標準偏差5.59であった(表2)。

日本語版と中国語版の相関係数は0.92と高く、 $t=-0.92$, $p=0.36$ と有意差は認められなかった。したがって、尺度の質問項目の翻訳が妥当であると判断し、64項目をすべて採用し、最終の中国語版質問項目とした。

IX. 考 察

1. 内容妥当性に関する検討

1) 専門家による質問項目の精練

質問項目の精練を依頼したのは、介護に関する研究やエンパワーメントに関する研究をしている専門家である。専門家自身の知識や研究を積み重ねることによって、何を測っているのかを経験的にまた理論的に検討することに適切な協力者であったと考えられる。内容が重複し答えにくい項目、具体的すぎて当てはまらない質問項目、意味が不明瞭と判断された項目、構成要素を代表していないといった項目について検討した。これは理論的な検討方法としては妥当であったと

いえるだろう。このような手順により、尺度全体として、質問項目の意味が構成要素と合致し、多数の質問項目の意味が重複せず、言葉づかいが妥当であり、構成要素ごとの項目数にバランスがとれていると考えられる。

2) エキスパートによる質問項目の修正

検討を依頼したエキスパート4名は、修士以上の学位をもっており、介護者に関わり、介護に関する研究をしている(3名)、老人看護を研究し、介護者との関わりが多い(1名)ことから、介護や介護者の実態に合致した質問項目の適切性を十分に判断できると考えられる。さらに、質問項目と構成要素の合致率、および構成要素と質問項目とのIndex関連指数を求めたという質的方法と量的方法を併せて検討したため、方法としては妥当であると考えられる。また、内容妥当性の検討結果としては、合致率は平均75%以上(協力者の4人のうち3人以上)であった。さらに75%に達していない項目に関しても、エキスパートと一緒に操作的定義と照らしながら修正したため、質問項目は最初に理論的に設定した要素の意味を説明できていると言える。

このように、「中国における主介護者エンパワーメント尺度」の枠組の構成は、内容的に妥当であると考えられる。そして、「個人的なリソース」、「介護に関する主体性」、「介護の信念」、「介護に関する知識と技術」、「周囲への気兼ね」、「要介護者との絆」、「介護の役割認識」、「介護という善行」、「介護の結果期待」という9要素のそれぞれ質問項目も、構成要素を代表しているものと考えられる。

2. 翻訳の妥当性に関する検討

河口(1998)は、質問紙の翻訳妥当性について、より厳密さ、正確さを要求するなら、反訳する必要があると指摘している。本研究において、反訳してもらった協力者は、中国語と日本語とも堪能な在日中国人留学生であり、対象者としての選択は妥当であったと考えられた。そして、日本語の原版を見せずに中国語版を日本語に反訳し、協力者の訳した日本語版を再度中国語に反訳しても、すべてが一致したことから、翻訳の再現性があると考えられる。

一部では文の意味は通じているにもかかわらず、用いた動詞の漢字が異なることや語尾の相違は、中国人の日本語の使い慣れの程度や言語の専門家ではないこ

とが、反訳に影響を及ぼしたものと考えられた。

量的な手法で翻訳の妥当性を検証した結果では、協力者は、中国語と日本語とも堪能であり、高齢の親を介護した経験をもつ30~40代の中国人の看護師や医学研究者であったため、介護や介護者の実態に合致した質問項目の適切さを十分に判断できると考えられる。日本語版と中国語版を同じ対象者によって答えてもらう間隔は、「同一の測定尺度を同じ調査対象者に、ある程度の期間をあけて実施し、2回の調査で項目得点間の相関係数を求めて、それを信頼性係数とする方法である」(石井ら, 1999)という再テスト法の理論を根拠に基づいて実施した。Chou et al.(2002)は、英語の介護者負担感尺度を翻訳して台湾の介護者に向けて測定するために、1週間の間隔で、12人のデータによる翻訳妥当性の研究をしている。それを参考に、10名の協力者を決定し、回答者の記憶によって真の値に影響が及ぶことを避け、かつ回答者の状況の変化が起こらないように考慮した。また、日本語版と中国語版を1週間間隔で、それぞれ調査を実施したことも適切であったと考えられる。さらに、データから分析した結果は、日本語版と中国語版の相関係数は0.92と高かったので、質問項目の翻訳が十分に妥当であると考えられる。

3. 研究の限界と今後の課題

本研究では、質的・量的データによる尺度の内容妥当性や翻訳妥当性のみを検証した。合致率75%以下の22項目に関しては、修正を加え、理論的に妥当であると考えられたが、合致率の再チェックのデータの検討や各要素の理論的考察が課題として残されている。

今後、この尺度をより精練するために、合致率の再チェックを行い、より多くの中国人の対象者で構成概念妥当性・基準関連妥当性および信頼性の検証および各要素ごとの理論的妥当性の検討を行う必要がある。さらに、文化的な比較をしたうえで、他の特性や方法も用いて尺度の併存妥当性や予測妥当性を検討していく必要がある。

X. 結 論

本研究により、「主介護者エンパワーメント尺度」は内容妥当性の高い尺度であることが示された。また、翻訳妥当性が確保されたため、日本と中国の文化的な

比較を行う研究にも、これからは適用できる尺度であるといえよう。さらに、中国語版で中国の介護者を対象にプレテストや本調査をするために用いることができるものと考えた。

謝辞：本研究に貴重なデータを提供していただきました16名の研究協力者の皆様、ご指導をいただきました兵庫県立大学の森口育子先生、南裕子先生、新潟大学(現在、東邦大学)の高木廣文先生にお礼申し上げます。また、助言や修正をいただいた兵庫県立大学の先生の方々にもお礼申し上げます。さらに日本語のチェックやアドバイスをいただいた日本の友人や中国の友人の皆様に感謝の意を申し上げます。

なお、本研究は、平成16年度に兵庫県立大学看護学研究科に提出された博士研究の一部を修正・加筆したものである。

文 献

- 麻原きよみ(2000)：エンパワメントと保健婦活動—エンパワメント概念を用いて保健婦活動を読み解く、保健婦雑誌, 56, 1120-1126.
- Chou-K., Jiann-Chyun-L., Chu-H. (2002). The Reliability and validity of the Chinese version of the caregiver burden inventory, *Nur. Res.*, 51(5), 324-331.
- 呉小玉(2001)：中国の地域中核病院における退院指導の現状と課題, *日中医学*, 16(4), 27-31.
- 呉小玉(2003)：高齢患者の退院指導に対する受け止め方と自己効力感に関する研究, *ヒューマン・ケア研究*, 3&4, 65-76.
- 呉小玉(2005 a)：中国における主介護者のエンパワメント尺度の開発に関する研究, 兵庫県立大学看護学部博士論文.
- 呉小玉(2005 b)：中国におけるエンパワメント概念の構成に関する研究, *日本看護科学学会学術集会講演集*, 25, 263.
- 呉小玉, 森口育子(2006)：「主介護者のエンパワメント尺度」に関する理論的妥当性の研究, 第10回日中看護学会学術交流会論文集, 125-128.
- 呉小玉, 周艳华, 李美华(2004)：老年患者对出院指导接受過程的測量工具的研究, *中華護理雜誌*, 5, 11-15.
- ヒマラヤ技術協力会(1978)：発展途上国農村における参画的自力更生開発理念とその適用方法に関する研究, 総合研究開発機構(NIRA)出版.
- 井伊久美子(1996)：住民の力量形成—地域におけるケアのパラダイムシフト, *看護研究*, 29, 465-471.
- 石井京子, 多尾清子(1999)：ナースのための質問紙調査とデータ分析, 30-31, 医学書院.
- 河口てる子(1998)：看護調査研究の実際, 尺度の妥当性検討, *看護研究*, 30(6), 85-89.
- 金佩璋(1998)：從聖靈到靈性, 女協通訊, Jan.
- 金葉(2000)：社区保健服務的需求与護士参与的潜在優勢, *中華護理雜誌*, 4, 35-36.
- Klakovich M. (1995) : Development and psychometric evaluation of the reciprocal empowerment scale, *J. Nurs. Measurement*, 3(2), 127-143.
- Lynn M. R. (1986). Determination and quantification of content validity, *Nurs. Res.*, 35(6), 382-385.
- Man D. W. (1998). The empowering of Hong Kong Chinese families with a brain damaged member : Its investigation and measurement, *Brain Injury*, 12(3), 245-254.
- Man, D., W. (2002). Family caregivers' reactions and coping for persons with brain injury, *Brain Injury*, 16(12), 1025-1037.
- Mok E., Chan F., Chan V., et al. (2002). Perception of empowerment by family caregivers of patients with a terminal illness in Hong Kong, *Int. J. Palliat. Nurs.*, 8(3), 137-145.
- 森田ゆり(1998)：エンパワメントと人権：こころの力のみなもとへ, 解放出版社.
- 野嶋佐由美(1996)：エンパワメントに関する研究の動向と課題, *看護研究*, 29, 453-464.
- 野澤美江子(2003), 不妊治療を受けているカップルの親密さを測定する尺度開発信頼性・妥当性の検討, *日本看護科学学会学術集会講演集*, 23, 379.
- 北京語言学院(2000)：簡明漢英辭典, 商務印書館.
- 下山田鮎美, 吉武清實, 三島一郎, 他(2002)：エンパワメント理論を用いた実践活動および研究の動向と課題, *宮城大学看護学部紀要*, 5(1), 11-19.
- 小学館国語辞典編集部(1974)：日本国語大辞典(第1版), 小学館, 62.
- 施達(2003)：她與他(男と女), 呼聲, 90.
- 朱玉, 周婷玉(2005)：中国第13亿个公民今日在北京妇产医院诞生. 新华网北京, from http://cn.news.yahoo.com/050105/349/27_wfo.html
- Simmons C. H., Parsons R. J. (1983) : Empowerment for role alternatives in adolescence, *Adolescence*, 18(69), 193-200.
- Wallerstein, N. (1992) : Powerless, empowerment, and health : Implications for health promotion programs. *Am. J. Health Promotion*, 6(3), 197-205.
- WHO/島内憲夫(1986)：21世紀の健康戦略2 ヘルスプロモーション, —WHO：オタワ憲章—, 垣内出版.